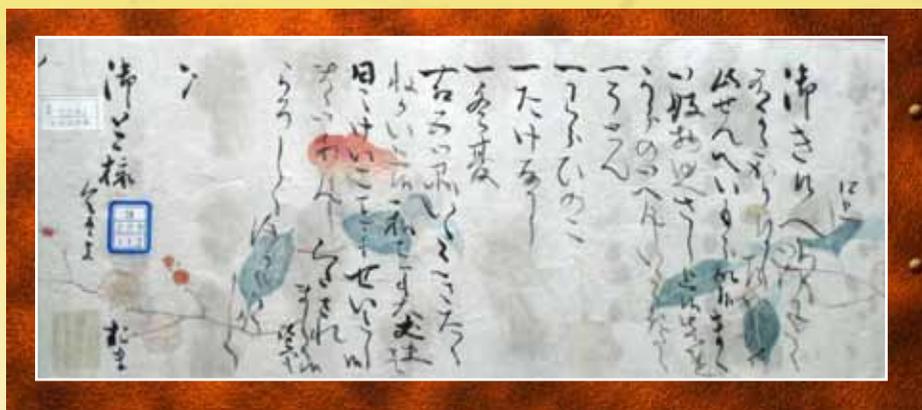


弘前城築城400年祭記念事業

古文書で見る「弘前城あれこれ」

《4分冊の内第1冊》

監修 田澤 正



弘前市立図書館後援会
弘前市立弘前図書館

古文書で見る「弘前城あれこれ」(四分冊の内第3冊)／目次

▼食 事

若殿様の正月料理……………(毛内昭夫) 4

追(大) 手門は沼に、東門は川に建てた
(田澤正) 36

▼生 活

寛文元年の諸法度……………(笹森洋子) 7

お城まる見えの茂森山を削り崩す
(田澤正) 40

城内にあった侍屋敷と町……………(田澤正) 11

北門が追(大) 手門であった…
(今泉洋) 46

殿様と琵琶……………(中村信二郎) 13

『時慶卿記』で見る為信、信建、信牧
(田澤正) 49

殿様の忍び口、本丸の極秘の間(田澤正) 16

洪水図から見る城の防御地形…
(田澤正) 51

本丸から金瓶盗まれる……………(田澤正) 18

津軽最大の一揆・民次郎一件(毛内昭夫)
(田澤正) 53

弘前城のお能初めと曲目……………(佐藤博) 20

津軽勢シャクシャインの乱へ出兵
(中村信二郎) 56

襖紙を千六百枚つけた久祥院館

津軽に流された公家さま「花山院忠長卿
の真筆」……………(田澤正) 59

本丸の御金蔵破り……………(鳴海紀) 26

津軽の殿様が刊行した豪華本『獨樂徒然
集』……………(笹森洋子) 61

本丸の御金蔵破り……………(鳴海紀) 26

南塘グラウンドでボートと水練が行われ
ていた……………(鳴海紀) 63

▼行 事

元禄十三年のお城の正月行事(笹森洋子) 29

津軽信政の参勤江戸上り行列次第
(毛内昭夫) 33

津軽信政の参勤江戸上り行列次第

石垣組みの実際、本丸戌亥の石垣修葺

津軽信政の参勤江戸上り行列次第
(毛内昭夫) 33

石垣組みの実際、本丸戌亥の石垣修葺

▼史 実

石垣組みの実際、本丸戌亥の石垣修葺

石垣組みの実際、本丸戌亥の石垣修葺

西洞院時慶卿宛 為信の長男・信建の

書状と近衛公の連歌…………… (田澤正)

西堀の景観はどうしてできたか (田澤正) 71

日本一のお城のさくら…………… (今泉洋) 74

薄幸のお姫様・たまの手紙 (中村信三郎) 77

お城の崩壊・明和の大地震…………… (鳴海紀) 79

弘前藩か津軽藩か、使われていた公印 (佐藤博) 82

風水に基づいた城づくり…………… (田澤正) 86

戊辰戦争と弘前藩…………… (佐藤博) 88

雪が降っていなかった吉良邸討ち入り日 (中村信三郎) 90

▼動物

お姫様をおびえさせたお城のキツネ (鳴海紀) 94

昔から棲んでいたお城のカラス (鳴海紀) 97

▼信仰・宗教

北奥最大のお祭り「弘前八幡宮の祭礼」

と賀田門の大きさ…………… (田澤正)

津軽総領主津軽信建銘の鰐口… (田澤正) 108

108 100

本書は、弘前城築城四百年祭記念事業として弘前市立図書館後援会が主催した「古文書で見る「弘前城あれこれ」(共催・弘前市立弘前図書館、後援・弘前城築城四百年祭実行委員会)へ出展された「原文」読み下し文」「解説文」からなるパネルを収載したものである。

「古文書で見る「弘前城あれこれ」展は平成二十三年十一月一日から十三日までの期間、弘前図書館で開催されたが、本展の企画を実現するに当たっては、弘前古文書教室(会長・鳴海紀氏)の顧問でもある田澤正後援会会長が同教室の協力を得、自身も含め、七名の執筆者による三十五点のパネルとして結実したものである。

なお、本書へ掲載された図版等で、提供元の記載がないのは、弘前古文書教室及び弘前図書館の所蔵である。

●津軽勢シャクシャインの乱へ出兵

中村信三郎

◆シャクシャインの乱

シャクシャインの乱とは、近世前期の寛文年間に蝦夷地で発生したアイヌ民族蜂起事件である。

寛文九年（一六六九）六月、蝦夷地シベチャリ（静内）の首長シャクシャインが率いたアイヌが一斉に起ち上がり、西地区のマシケ・ヨイチ、東地区のシラオイ・ミツイシ・シラヌカなどで、交易船などを襲った。

◆事件の原因

松前藩が商場知行制を蝦夷地に布しき、アイヌ民族を蝦夷地内に封じ込め、不等価交換を押しつけたこと、差別策を強行したことにある。



▶シャクシャインの像

◆事件に対した弘前藩の動き

六月三十日に蜂起の第一報がもたらされた。弘前藩では松前藩と物資や人事の交流などで関係が深かったため、八月十二日に兵学者であった吉村場左衛門ほかを派遣し、情報収集にあたらせた。

同月二十三日には、蜂起に対応するため、総大将・足軽大将や軍勢、鉄砲の準備などを申しつけていた。

◆出兵と帰陣

九月四日に、幕府から「侍、足軽、雑兵とも四、五百人、松前へ差

▼大手門から見た三の丸通り



し遣わし云々」とした出兵の命令書が藩に到着した。

すぐさま翌五日に、杉山八兵衛を侍大将に任じ、同日の午後五時ごろ総勢発足、八日には松前に到着するという素早い動きをしていた。閏十月七日になってシャクシャインを討ち、蜂起一件落着の報が着いた。

杉山八兵衛が率いた総勢は、翌月十一月七日に松前を出船し、同日三厩へ着船、九日は浪岡で一宿、十日に弘前に到着している。出兵から帰陣までの日数は九十五日間であった。

◆凱陣

到着の十日は、具足まかないのまま、総勢を二、三の丸に並べさせ、八兵衛は本丸に登城し、馳走と祝杯を受けている。

殿様から、「大儀であった」のねぎらいの言葉をもらい、総勢に二十日また三十日の休息が与えられている。

【原文の読み下し文】

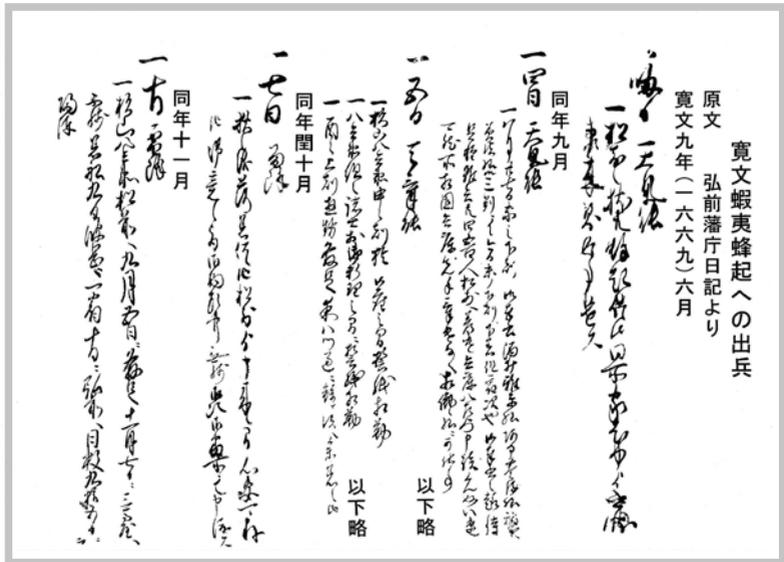
寛文九年（一六六九）六月

一 晦日 天気能

一 松前の狄共蜂起仕り候由、同所家老中より書状申し来る。則、返事遣わす。

同年九月

一 四日 天気能



寛文蝦夷蜂起への出兵

原文 弘前藩庁日記より
寛文九年（二六六九）六月

一 廿二日 夜

一 翌朝、松山八兵衛、申の刻御座の間において誓詞相勤める。

同年九月

一 廿一日 夜

一 翌朝、松山八兵衛、申の刻御座の間において誓詞相勤める。

一 廿日 夜

一 翌朝、松山八兵衛、申の刻御座の間において誓詞相勤める。

同年閏十月

一 廿七日 雨降

一 翌朝、松山八兵衛、申の刻御座の間において誓詞相勤める。

同年十一月

一 廿一日 雪降

一 翌朝、松山八兵衛、申の刻御座の間において誓詞相勤める。

一 八月廿七日未の下刻、御奉書酒井雅楽様・阿部豊後様・稲葉美濃様御三判にて、今日未の刻下着。但し宿継ぎなり。御奉書の趣、侍・足軽・雑兵共四・五百人松前へ差し遣わし、兵庫・八左衛門と申談、く

んぬい辺の然るべき所を相固め、兵庫手先氣遣いなく相働き候様に仕るべき事。

以下略

一 五日 天気能

一 杉山八兵衛、申の刻御座の間において誓詞相勤める。

一 八兵衛組の諸士御料理の間において誓詞相勤める。

以下略

一 西の上刻惣勢（総勢）発足。夜八つ過ぎに鱒ヶ沢へ参着の由。

同年閏十月

一 七日 雨降

一 狄の儀落着仕り候由、松前より申し来たり候間、心安く存ずべく由御意の旨、御物頭中残らずへ御次御番所にて申し渡す。

同年十一月

一 十日 雪降

一 杉山八兵衛松前へ九月五日に発足、十一月七日に三馬屋（三厩）へ残らず着船、九日波岡（浪岡）へ一宿、

十日に弘前へ日数九十五日にて帰陣。

● 津軽に流された公家さま 「花山院忠長卿の真筆」 田澤 正

◆ 忠長卿と「猪熊事件」

忠長卿は、公卿・左大臣花山院定憲の二男で、官位は従四位上、近衛権少将である。

卿は、後陽成天皇の逆鱗に触れたという、公家と女官の密通事件（猪熊事件）に関連して当地に移されてきた。

首謀者と見なされ、容姿天下無双といわれた猪熊教利卿と兼保備中は死罪、ほかは遠近の国々へ配流または無罪となり、広橋典侍ら女官五人は伊豆へ流された。

卿は寛永十三年（一六三六）に罪を許され、晩年は京都に還り、寛文二年（一六六二）七十五歳で没した。

◆ 忠長卿と津軽

忠長卿は、はじめは北海道松前に、次いで津軽岩木の高屋に、黒石に、そして水郷地であった現在の弘前南塘グラウンド土手の北側に移っている。

黒石で「鶴の湯」を発見したとか、水面に映る岩木山を眺めて「池に映る岩木は不二の姿にて眺めは庭の三保の松原」と詠み、「鏡ヶ池」の名はこれからはじまるといわれるなど、多くの逸話を遺している。

展示の「掛け物」は黒石滞在中の書簡と推察される。

明治の碩学・下澤保躬は「卿は温雅風流に富み、能書の誉れが高かった。和歌や茶道俳諧を好み、当地方の文学文化の発展に大きく貢献した」と述べ、「眉目秀麗容姿端然、官女のために不遇の生涯を送ったのは誠

に惜しまれる」と評している。

ちなみに、この時の藩主は、津軽氏二代といわれる信牧（枚）である。

※「花山院忠長卿の真筆」は平川市外川睦男氏の所有で、鎌田陸奥男氏の紹介によった。

【原文の読み下し文】

御懇ろの使札過当の至り候 然れば

其元へ近年の涼しき風入り申し候由

禮の事と存じ候 殊にひや汁

仰せ付けられ候由 今時分尤も 是又

珍美申し候 未だ隙入らず候間 頓て

参り申すべく候 不宣

六の廿四

忠長書判

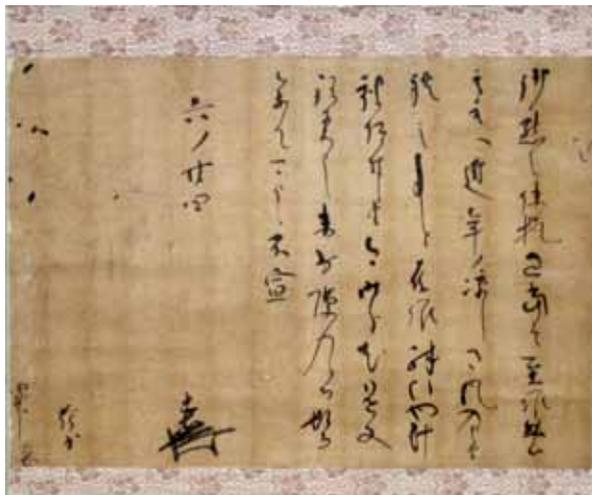
花少「花山院少将」

※新暦の七月二十四日

◆書簡の大意

御懇ろの御招待有り難く、涼しい風が入ってきたようなすがすがしい気分である。特に珍味のひや汁を馳走したいとのこと、楽しみにしていたが、あいにく今のところ隙がなく、その内に伺いたいと思っている。意を述べ尽くせないが失礼する。

▶花山院忠長卿の真筆



● 津軽の殿様が刊行した豪華本『獨樂徒然集』

笹森 洋子

◆ 弘前藩主・津軽信壽公は、隠居した享保十六年（一七三一）に漢詩・和歌・俳諧の文芸本を刊行した。この本は上巻（乾の巻）と下巻（坤の巻）に分かれ、挿し絵入りの文芸本として貴重、画期的と評価されている。

現在は、弘前市立博物館と弘前市内の個人、それとイギリスのケンブリッジ大学のみ所に所蔵されている資料である。

内容は、当代一流と称された小川破笠、英一蝶、同一蜂らによつたもので、参勤途次の各名所、津軽中野の紅葉、浅虫の湯の島、帰国したときの岩木山の初雪の景など、郷土の風景も多く織り込んだ大名豪華本である。

このうち、小川破笠は、俳諧、絵画、漆器、彫刻の制作にすぐれ、作品は国立博物館に所蔵されているほどである。信壽公に仕え、弘前にも滞在、作品を遺しており、当地とは馴染みが深い。

特筆すべきは、信壽公と破笠は、歌舞伎役者で名優といわれた二代目市川團十郎こと初代海老蔵と親しく、「団十郎日記」に間々登場していることであろう。



▶ 『解説』 獨樂徒然集』表紙

●南塘グラウンドでボートと水練が行われていた

鳴海 紀

◆南塘溜池

南塘グラウンド（現弘前大学医学部グラウンド）とは慶長十九年（一六一四）六月、弘前藩が城南の要害地として構築した南溜池であり、鏡ヶ池とも呼ばれていた。

◆なぜ南溜池を掘り替えたか

嘉永六年（一八五三）のペリー来航以来、異国船が青森湾や日本海に出没するようになり、万一の緊急事態に備えて沿岸の防備を強化していた。その一環として水練の熟達があつたのである。

安政五年（一八五八）七月の御日記に、「このたび南溜池を穿り上げのうえ、水練稽古場に仰せ付けられ候云々」とある。

異国船の出没を「国難」とみた幕府は、藩にも対抗策を命じていたのである。

溜池の掘り下げは突貫工事でなされ、八月に始まり十一月に完成した。四万人以上動員されたとある。

圧巻は翌年六月に洋式短艇・バッテリーの進水式を実施していることである。

◆水練奨励のお触れ

水練の稽古については、安政六年六月十七日に次のようなお触れが出ている。

御家中並びに諸組諸支配の子弟どもまで、このたび南溜池において水練並びにバッテリーの乗り回し稽古仰せつけられ候云々

以来、子弟たちは稽古に励むことになったのである。

七月になって殿様（順承）が水練を御覧なされ、「何れも出精の儀一段の事に思し召し云々」と仰せられて、その成果にきわめてご満悦の体だったという。

南塘グラウンドで

水練がおこなわれた？

原文 弘前藩庁日記より

安政六年（一八五九）

六月八丙午日 快晴

一 バッテラ皆出来につき、明後十日台下げ致し候間、見分の儀申し出で、退出懸け御用人中並びに大目付、御備方取り扱い見分に罷り越し候。この旨申しつけべき旨勘定奉行へこれを申し遣わす。

七月二十八日 快晴

一 今日南溜池において水練高覧につき、同所へ一統罷り越し候につき、出仕これなし。

一 南溜池御小屋において佐野茂助申し渡しの覚え。

御 徒 頭

今日水練遊ばされ候処、何れも出精（精）の儀、一段の事に思し召され候。猶、この上出情致させ候様仰せ出される。

【原文の読み下し文】

安政六年（一八五九）

六月八日 快晴

一 バッテラ皆出来につき、明後十日台下げ致し候間、見分の儀申し出で、退出懸け御用人中並びに大目付、御備方取り扱い見分に罷り越し候。この旨申しつけべき旨勘定奉行へこれを申し遣わす。

一 今日南溜池において水練高覧につき、同所へ一統罷り越し候につき、出仕これなし。

一 南溜池御小屋において佐野茂助申し渡しの覚え。

今日水練遊ばされ候処、何れも出精（精）の儀、一段の事に思し召され候。猶、この上出情致させ候様仰せ出される。

65 南塘グラウンドでボートと水練が行われていた

▼『日本人が描いたバッテリーの図』



▼南塘グラウンド（現弘前大学医学部グラウンド）



●西洞院時慶卿宛 為信の長男・信建の書状と 近衛公の連歌

田澤 正

●西洞院^{にしとういん}時慶卿宛 信建の書状

平川市 奈良信光氏蔵

◆書状の大意と、津軽信建と近衛家、左馬助

左馬助が御預かりした書状有難く拝見した。近衛殿からの御書は殊更に有難かった。

津軽に到着後すぐに書状を上げるべきところ、何かに取り紛れ申し訳ない。

来春は此方からいろいろ差し上げたいと思っている。

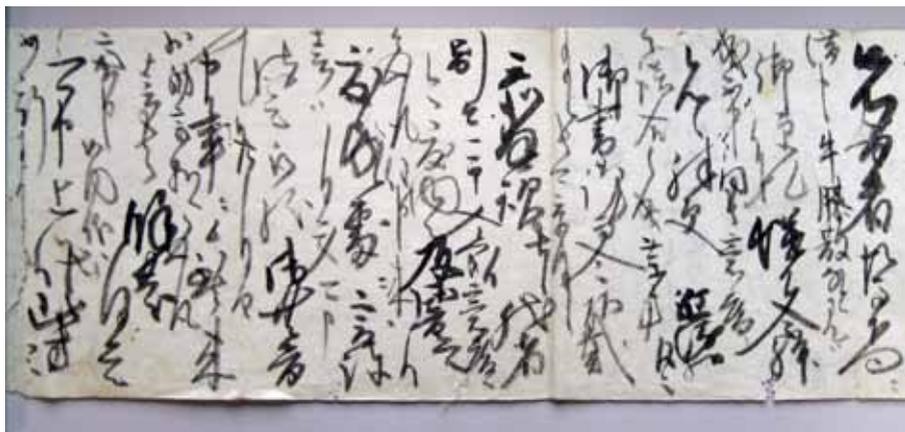
一同変わりなく元気であるから御安心願いたい。

書状の初めの部分と、本文の行間にある猶書・追伸文は「この頃体調がすぐれないので、[※]意安の調合した薬を御願いしたい」とあり、「[※]少納言、御内儀にもよろしく」とある。

※意安 時慶卿と親しい京都の典医。豊臣秀次に仕えた法印で、後陽成天皇不予に際して御薬を差し上げている。

※少納言は時慶卿の嫡男・時直、内儀は卿の奥方である。





◆この書状は、津軽信建が長年住んでいた京都から津軽へ安着したことを「断金の友」西洞院時慶卿に宛てた第一報である。

慶長七年（一六〇二）関ヶ原戦の二年後に書かれた真筆であり、当地方で最も古い貴重な資料である。

同時に、信建と公家の交際を初めて明らかにした、画期的な資料でもある。

【書状の読み下し文】

先日は左馬下向※に際し

御便札有難く拝見候 殊更※に近衛殿の

御書を頂戴し 忝なく拝覧仕り候 然れば

この度御音信に及びたき儀に候ところ

ここ許かれこれに取り紛れ 御無音

申す事に候 この

春には余慶

申し上げべくと存じ候 此方の

儀は何れも無事に候条



御心易かるべく候 猶 重ねて
貴意を得べく候 恐惶頓首

津軽宮内大輔

十月十七日 信建 書き判

西洞院様

参御尊答

※左馬 左馬助。為信の娘・富の夫で、平賀大光寺の城主・津軽左馬助建広。信建の死去後、津軽氏の跡継ぎは信建の嫡男であると主張した人物である。津軽を追放されたのち、徳川家の御典医となっている。

※下向 ここでは、左馬助が京都から津軽へ帰ってきたこと。

※近衛殿 左大臣関白氏の長者、近衛信尹。今年五月〜七月に行われた弘前城築城記念展「近衛家陽明文庫名宝展」で公の事績が紹介されたように、和歌や絵にすぐれ、書は当代一と称された。号・三藐院。ちなみに信尹公は「花山院忠長卿」(六一頁参照)の絵の師である。

※津軽宮内信建。為信の嫡男。豊臣氏と石田三成の股肱の武将。津軽二代藩主とする有力な説がある。

※参御尊答 手紙の脇付け。宛名・相手に敬って差し上げるという意。

●近衛殿御興行の連歌

◆「御先代」の意味と連歌

この資料に見える「御家御先代」の「御家」とは津軽家、「御先代」は前の藩主・信建を指しており、二代藩主信建説を裏づけている文言である。

替え名の「杉」は近衛信尹公である。この中に信建の歌が含まれている可能性も決して少なくはない。ちなみに公は連歌「杉公御独吟千句」ほか多くを遺している。

【読み下し文】

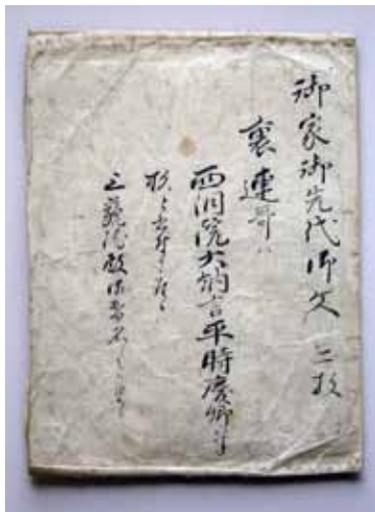
「御家御先代」御文 二枚

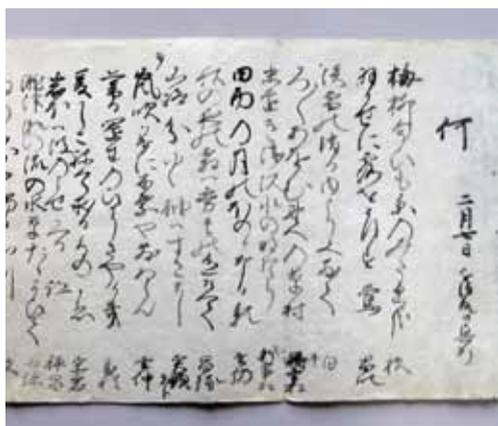
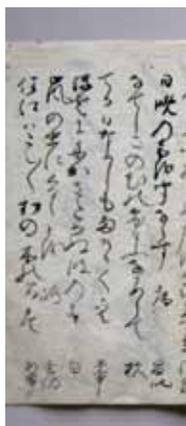
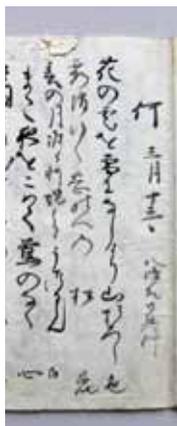
裏
連歌

西洞院大納言 平時慶卿筆

「杉」と書付け御座候は

三貌院殿の御替え名にて御座候





何 二月七日 近衛殿御興行

梅柳匂いも糸のみだれかな

杉

○近衛信尹公

羽かぜに露をこぼす鶯

昌代

淡雪の消る内より又敷て

白

いろいろあをむ野への草村

平宰相

○西洞院時慶卿

末遠き浅沢水の明くだり

新宰相

○同 時直

田面の月のほのかなる影

玄仍

秋の夜の霜は霧まの色そへて

昌琢

山路分ゆく袖はずさまじ

実顕朝臣

嵐吹かげに木葉や敷ぬらん

玄仲

暮る園生のひかりさやけき

春種

なでしこの花の散りそふながめして

杉

○近衛信尹公

てる日なりしも雨そそぐ空

平宰

○西洞院時慶卿

以下略

何 三月十三日 八条殿御興行

以下略

●西堀の景観はどうしてできたか

田澤 正

西堀の掘り下げは、十九世紀後半の、勤王と佐幕に分かれた戦乱のなか、全国の諸侯が去就に迷っていた時期に行われた。

弘前藩も、はじめは佐幕、のち勤王派に転ずるなど混乱していたのである。

こうした中で、「御日記」に「浮浪のやから奥羽へ立ち入り松前表へ渡海の趣風聞これあり」とあるように、兵乱を想定し、藩では関所堅めの分隊派遣、城内三の郭の雑木伐採などして急遽防備態勢を整えていた。

とりわけ防備上の最重要地点として、今の西堀の掘り下げがあったのである。

◆掘り下げた理由

今の「西堀」は、本丸の西を流れていた岩木川の跡である。天和二年（一六八二）に堰き止めたあと、長年の間に湿地となり、往来が自由になつていた。

維新の動乱に際し掘り下げて、築城時のような天然の要害にするというのが、掘り下げの理由であった。

現在の西堀—春陽橋から望む



た。



現在の西堀の桜のトンネル

「御日記」に、「格外の大手配で、費用も莫大だが早急に取りかかれ、城郭の普請は幕府の許可を得なければならぬが、今はそんな暇はない。とにかく急げ」とある。

◆ 工事期間と動員数

着工からほぼ一年、慶応二年（一八六六）四月二十四日に掘り下げが完了した。人夫約四万二千人、馬千三百三十匹を駆り立てている。

ちなみに当時の津軽領内の人口は二十五万七千二百余人で、このうちから約四万二千人が動員されていた。

なお、夏の暑さ凌ぎとして、人夫に益元散（漢方薬）を与えての突貫工事であつ

◆ 西堀が景観に変貌したいきさつ

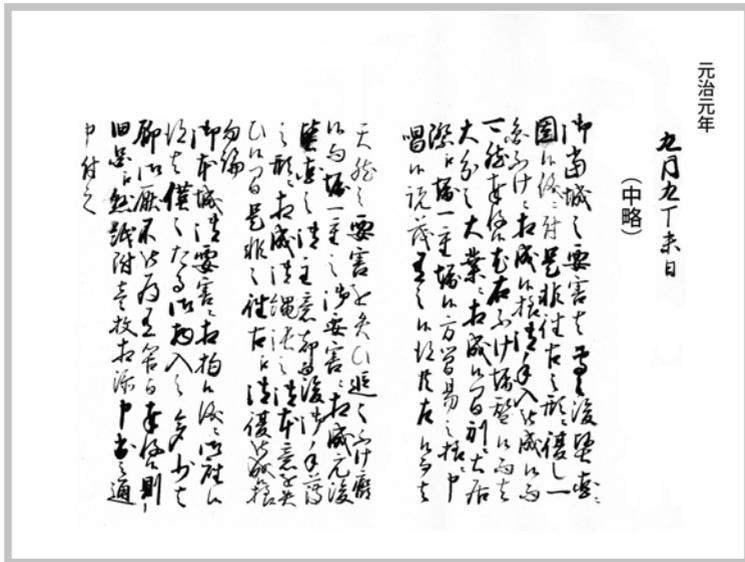
「西堀」は、弘前城の軍事上の重要工事として掘り下げた「要害の堀」であった。この堀際に桜が植えられたのは、日露戦争の勝利を記念した大々的な植樹といわれている。

ほかの郭の桜とともに見頃となってきた大正八年に、市内の有志が催した「花見の宴会」から始まり、やがて「観桜会」、「さくらまつり」へと発展、今では日本一の桜の名所・弘前城に変貌したのである。

爛漫の桜を水面に映す西堀の昼の景、ぼんぼり、水面に映る万朶の桜、春陽橋の朱、特に満開時の「花のトンネル」は庄巻である。



西堀東岸に遺る八重桜（開花）の古樹
文政五年（1722）に備前代公卿が献上の古樹と推定。



【原文の読み下し文】

元治元年（一八六四）九月九日「御日記」

御当城の要害は専ら後ろ堅固に困り候儀につきぜひ往古の形に復し

一円ふけに相成り候様御手入れ成され候て然るべくと存じ候

もつとも右ふけ掘り替え候ては大分の大業に相成り候間

別に土居際に堀一重堀り候方簡易のように申しとなえ候説もこれあり候えども

左候ては天然の要害を失い追々ふけすたれ候て堀一重の要害に相成り

元の後ろ堅固の御主意かえつて後ろ御手薄の形に相成り御縄張りの御本意を失い候間

ぜひぜひ往古へ御かえし成され候様御本城御要害に相拘わり候儀に御座候えは

僅々たる御物入りの多少は聊かも御厭いあり成されざる筈と存じ奉り候

則 旧図へ懸け紙つけ一枚相添え申し出の通り申し付ける

● 日本一のお城のさくら

今泉 洋

◆ 津軽地方で最も古いさくらは、弘前市西茂森町にある天満宮のしだれ桜と言われている。

弘前城のさくらは、今から三百年前の正徳五年（一七一五）に初めて植えられた。

◆ この年の三月二十七日の「御日記」に、「八名の家臣が十一本」献上したとある。

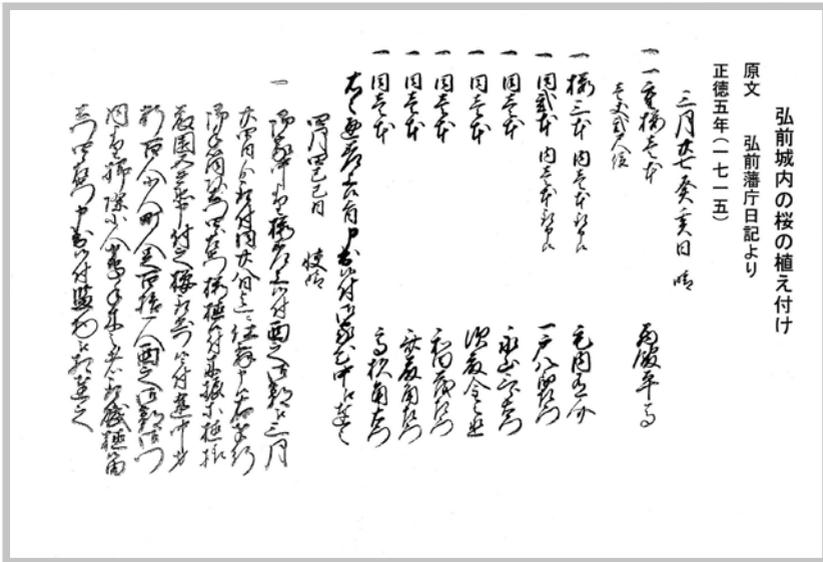
植えたのは、御花畑と言われていた西の郭、現在の根上り銀杏がある辺りで、三月二十四日から二十八日にかけて植え付けたともある。

また、四月六日にも、二十一名の家臣が二十五本のさくらを西の郭に植え付け、そのうちの一本は八重ざくらと記されている。

◆ 以上の三十六本のさくらは家臣が献上したもので、当時の殿様は文化殿様として知られる信壽公である。なにかと派手好きな藩主の御機嫌伺いに献上したようである。

◆ 「博多のどんたく」と一、二の人数を争っているお城のさくらも、初めは十一本から出発した。今では二千五百本にもなったさくらの満開は、まさに圧巻である。

花を褒めるのもさりながら、育て上げた「弘前人の風流」もさすがと言わなければならない。



弘前城内の桜の植え付け

原文 弘前藩庁日記より

正徳五年(一七一五)

三月廿七 奏美日晴

一 重桜壹本

西館平馬

壺丈式尺位

一 桜三本

毛内有介

一 同貳本

一戸八郎左衛門

一 同壹本

永山三郎右衛門

一 同壹本

須藤金之丞

一 同壹本

和田茂左衛門

一 同壹本

齋藤角左衛門

一 同壹本

高杉角右衛門

四月四日 快晴

一 弘前藩庁日記より
 三月廿七日 奏美日晴
 一 重桜壹本 西館平馬
 一 桜三本 毛内有介
 一 同貳本 一戸八郎左衛門
 一 同壹本 永山三郎右衛門
 一 同壹本 須藤金之丞
 一 同壹本 和田茂左衛門
 一 同壹本 齋藤角左衛門
 一 同壹本 高杉角右衛門
 四月四日 快晴
 一 弘前藩庁日記より
 四月四日 快晴
 一 御家中より桜差し上げ候につき、西の御郭へ三月廿四日より取り付き、同二十八日まで仕舞い申し候。右の奉行、御手筒頭土門四郎左衛門、桜植えつけ候。木振りなどの植えようは藤岡五兵衛にこれを申しつ

【原文の読み下し文】

正徳五年(一七一五)

三月廿七日

一 一重桜壹本 壺丈式尺位

西館平馬

壺丈式尺位

一 桜三本 内壺本取り申し候

毛内有介

一 同貳本 内壺本取り申し候

一戸八郎左衛門

一 同壹本

永山三郎右衛門

一 同壹本

須藤金之丞

一 同壹本

和田茂左衛門

一 同壹本

齋藤角左衛門

一 同壹本

高杉角右衛門

右の通り差し上げ候旨申し出で候に付、御家老中へこれを達す。

四月四日 快晴

一、御家中より桜差し上げ候につき、西の御郭へ三月廿四日より取り付き、同二十八日まで仕舞い申し候。右の奉行、御手筒頭土門四郎左衛門、桜植えつけ候。木振りなどの植えようは藤岡五兵衛にこれを申しつ



ける。桜取り寄せ候に付、途中才料（宰領）百人小人、町人足百十一人、西の御郭御門内より掃除小人、鳶、手木の者取りくばり植え候由。

土門四郎左衛門申し出で候につき、監物[※]へこれを相達する。

（後略）

※監物 喜多村監物（校尉・政方）は兵学者、藩の家老

職・重役である。母は山鹿素行の娘・鶴。

● 薄幸のお姫様・たまの手紙

中村 信三郎

◆この手紙は、嘉永四年（一八五二）に、たま姫が十二歳のとき、父・津軽家の殿様・順承公に差し上げた手紙である。

幼いころから手習いをなさっていたとしても、文字のなめらかさは見事である。

文中の「たけながし」と「冬夏」は、今なお高名な菓子舗・大坂屋（現大阪屋）の銘菓である。

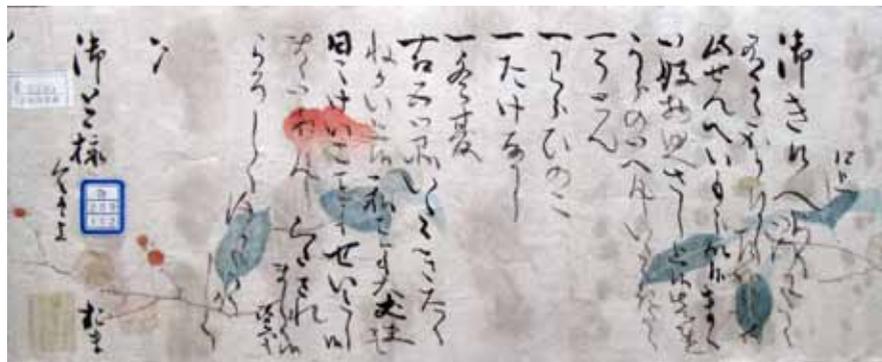
たま姫は、かつて長勝寺で管理されていた、ご存じの「ミイラ殿様」・承祐（つぐとみ）公と婚約していたが、承祐公は早世した。

こののち、名を常姫と改めて、順承公の後を継いだ殿様・承昭公と結婚している。

津軽家の血を絶やさぬための婚約、結婚であったが、武家の娘の定めとはいえ、幸い薄い御生涯であった。

二十三歳の若さで逝去。墓は東京上野の津軽家の菩提寺・津梁院にある。

▼津軽たまの書状 津軽順承宛



【原文の読み下し文】

口上

御きげんよく御めでたく

有りがたかりまいらせ候左様に候得ば

此のせんべいもらい候まゝ

御好物ゆへさし上げ候 先達て

からの御へんじいたゞきたく

一 うどん

一 わらびのこ

一 たけながし

一 冬夏

右五つ品いたゞきたく

ねがい上げ候 私ことも大丈夫
にて

日々けいごともせいだし候

まゝ御あんじくだされ

まじく候

皆へも

よろしくめでたく かしく

✂

御とゞ様

たま

参申上

●お城の崩壊・明和の大地震

鳴海 紀

◆地震の発生

明和三年一月二十八日、新暦の一七六六年三月八日の夕方六時ごろ地震が発生した。

未曾有といわれたこの地震の被害は甚大で、津軽地方で死者一三〇〇人余、家屋の倒壊は五五〇〇戸に及び、余震はほぼ一年も続いた。

弘前大学理学部（現理工学部）の前教授・佐藤裕氏は、新たに作製した家屋倒壊率の分布図から、震源域は浪岡から今別付近まで長さ五十キロに及んだもので、規模はマグニチュード七を超えていたと発表している。

◆お城の被害

この地震の被害は、お城の櫓破損五ヶ所、門の破損七ヶ所、塀倒れ四十五ヶ所、土蔵の破損二十二ヶ所、番所破損二十七ヶ所、城中の建物・屋形廻りも居住不能となり、城の機能を全く停止させたほどである。

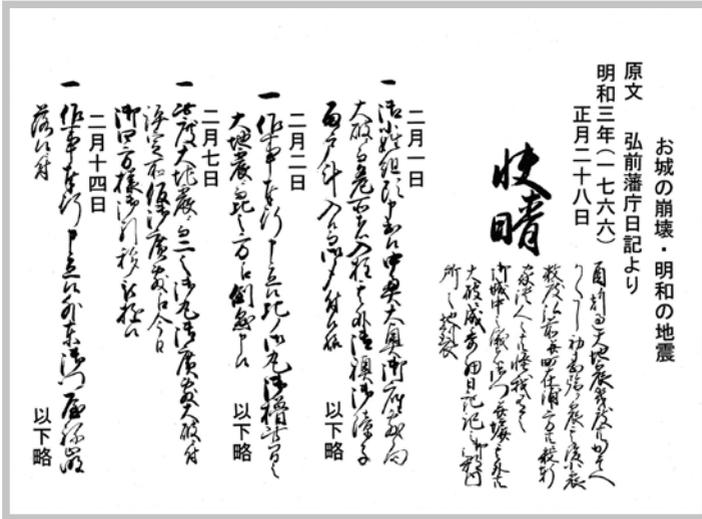
この年は殿様・信寧が帰国の年だったが、本丸屋敷が全壊したため、三の丸の屋敷を急遽補修し、四月二十八日にはぼ終わって、翌月十五日に御着城、御本丸入りになっている。

◆お城の復興

復興は、城の機能上必須の仮番所、御門、御蔵の仮小屋、三の丸の御用御仮屋などを優先にとりかかった。本丸の御屋敷は翌四年三月十日にとりかかり、完成は五年四月二十四日である。

この普請も五月八日に着城なさる屋形様に間に合わせるための突貫工事で、一年二ヶ月かかっていた。

*ここに掲載したのは、全資料のほんの一部である。「御日記」は余震、災害の状況を一年以上にわたって記録している。今年、千年に一度あるかないかといわれる東日本大震災が発生した。予告なしに襲う天災の対応として、この記録も重要な参考資料になるのではなからうか。



【原文の読み下し文】

明和三年(一七六六) 正月二十八日 快晴

酉の刻過ぎ・午後七時ころ・大地震、幾度ともかぞえがたし。はじめ甚だ強く震え、その後小震数度。

弘前ならびに町^{*}在浦方ともに数軒家潰れ、人々とも怪我これあり。

御城中の儀は御門ならびに堀、そのほかとも大破になる。

委細は日記にこれを記す。御郡内所々地裂。

同年二月一日

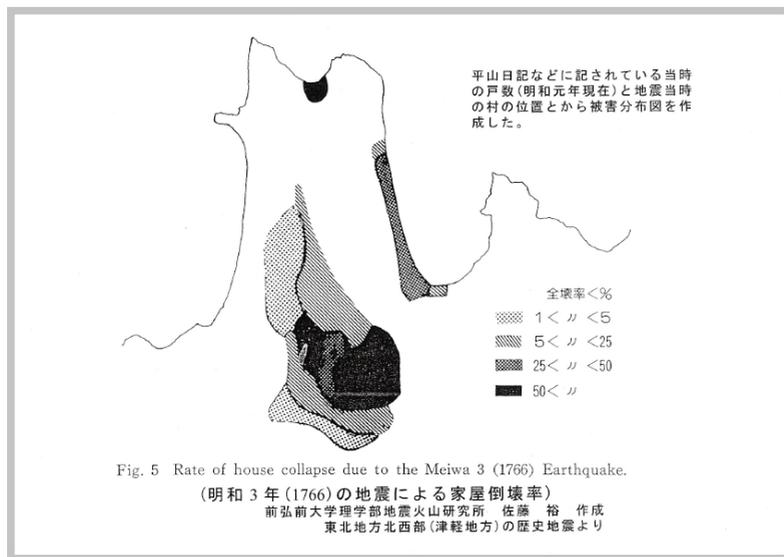
一、御小姓組頭申し出で候。中奥大奥御座敷向き大破にて、危

なき所は入り柱、その外は御襖、御障子、雨戸ばかり入れ候て御締め付け候よう 以下略

同二月二日

一、作事奉行申し立て候。北の御丸御櫓、この間の大地震にて北の方へ倒れ懸かり申し候。 以下略

同二月七日



▲本丸屋敷の玄関跡
 ◀玄関の礎石

一、このたびの大地震にて、二の御丸御広敷大破につき
 以下略
 同二月十四日
 一、作事奉行申し立て候。外東御門の屋根崩れ落ち候につき
 以下略
 ※町在浦方 町中、在の村々、海辺の漁村。

弘前城築城400年祭記念

古文書で見る「弘前城あれこれ」

4分冊の内第3冊

平成23年11月 発行

平成24年 3月 PDF版

弘前市立図書館後援会
弘前市立弘前図書館